

おくのほそ道『旅立ち』定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・俳句の頻出設問と解答

組 番 氏名

／100点

本文

月日は百代の過客〔①〕にして、行きかふ年もまた旅人なり〔②〕。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ〔③〕やまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸据うるより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別荘に移るに、

草の戸も住み替はる代ぞ雛の家〔④〕

面八句を庵の柱に懸け置く。

設問

- 冒頭の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」を、現代語訳しなさい。
- 冒頭の「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」には、ある**表現技法**が用いられている。その技法名を答え、どことどこが対応しているかを説明しなさい。
- 傍線部①「百代の過客」とはどのような意味か、わかりやすく説明しなさい。
- 傍線部②「なり」の文法的説明として正しいものを選びなさい。
ア 伝聞の助動詞 イ 断定の助動詞 ウ 四段活用動詞の一部 エ 形容動詞の活用語尾
- 「舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者」とは、具体的にどのような職業の人々を指すか。二つ答えなさい。
- 「日々旅にして旅をすみかとする」を、現代語訳しなさい。
- 「古人も多く旅に死せるあり」とあるが、ここでいう「古人（昔の人）」にあたる人物として、芭蕉が思い描いていたと考えられる人物を、日本・中国それぞれから一人ずつ挙げなさい。
- 「古人も多く旅に死せるあり」を、現代語訳しなさい。
- 「片雲の風に誘はれて」の「片雲」とは何か、わかりやすく説明しなさい。
- 傍線部③「漂泊の思ひ」とは、作者のどのような気持ちか。本文全体をふまえて説明しなさい。
- 「白河の関越えんと」の「ん（む）」は助動詞である。その意味として最も適切なものを選びなさい。
ア 過去 イ 打消 ウ 意志 エ 完了
- 「そぞろ神」「道祖神」は、ここでそれぞれどのような働きをするものとして書かれているか。簡潔に説明しなさい。

13. 「取るもの手につかず」とは、どのような心の状態を表しているか。現代語で説明しなさい。
14. 「三里に灸据うる」とは、何のために行ったことか。簡潔に説明しなさい。
15. 発句「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」には、住む人が替わったことへのどのような感慨がこめられているか。「草の戸」と「雛の家」の対比に触れて説明しなさい。
16. 傍線部④の発句「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」について、季語と季節を答えなさい。
17. 傍線部④の発句「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」から、切れ字を抜き出し、その働きを説明しなさい。
18. 「面八句を庵の柱に懸け置く」とは、どういうことか。わかりやすく説明しなさい。
19. 【文学史】『おくのほそ道』の作者は誰か。また、この作者が旅の同行者として連れて行った弟子の名も答えなさい。
20. 【文学史】『おくのほそ道』のような、旅の記録に俳句をまじえた文学のジャンル名を答えなさい。
21. 【文学史】『おくのほそ道』が成立したのは何時代か。また、その文化の中心となった元号（年号）を一つ答えなさい。